

小学校道徳における死生観構築に関する批判的検討

—教育内容から考える—

山 本 詩 織

Abstract

"kokoro no no-to" and "watashitachi no doutoku" are the teaching aid that are used widely. These have been taken up and considered to make it clear from education contents about how to view the construction of views of life and death at moral education in an elementary school. Then "kokoro no no-to" and "watashitachi no doutoku" can confirm two features about the handling of "life".

It is said that there are few pages that cover these items in those books. This shows little of the percentage by which the item about the construction of views of life and death is treated in moral education.

Next it is said that the "life" is placed with the utilized "life". It is not possible to place the "life" as a personal right from the angle as the human rights, and this is the situation that it is not possible to suggest the right understanding of own one's right to decide. It is urgently needed to reform this situation in which the nation uses government authority to strip children of their subjectivity and activeness.

キーワード……道徳教育 心のノート 私たちの道徳 死生観構築

1 はじめに

本稿は小学校における道徳教育での死生観構築がいかに行われているかについて、教育内容から明らかにすることを目的とする。領域である道徳には教科書が存在していない。その中で本稿では『心のノート』と『私たちの道徳』を取り上げたい。

『心のノート』は、2002 年度から全国 1200 万人の小中学生に対して文部科学省が配布した道徳の補助教材である。この位置づけに関しては、初等中等教育局長が都道府県教育長宛てに出した文書で教科書でも副読本でもないと明確に示されている¹⁾。『心のノート』は 2012 年の「道徳教育実施状況調査」によると小学校の道徳の時間において 90.6%の活用が報告されており²⁾、最も指導に活用された教材であることを示している。

『私たちの道徳』は『心のノート』を全面改訂したものであり、2014 年度に配布されている³⁾。2014 年の「私たちの道徳」活用状況等調査結果によると、小学校の道徳の時間において 99.5%の活用が報告されている⁴⁾。『心のノート』の活用状況と同様に、『私たちの道徳』は道徳の時

間において最も使用されている教材だとわかる。すでに、現在までの領域から教科へと教育課程上の位置づけの変更が決定しており、検定教科書の作成が始まっている。この検定教科書は自ずと『私たちの道徳』を模範としており、『私たちの道徳』は現在、事実上の教科書と化しているのではないだろうか。

以上のような状況から、『心のノート』とその全面改定版である『私たちの道徳』は小学校における道徳教育で最も使用されている教材である。この2つを取り上げその内容を分析することで、道徳教育での死生観構築がいかに行われているのか明らかにしていくことができる。

『心のノート』や『私たちの道徳』に関する先行研究は数多くある。誕生の経緯に関する研究を行っている高橋⁵⁾や、愛国心教育という視点からその危険性を言及した瀬川⁶⁾、平林⁷⁾、高垣⁸⁾の研究、教科化とその背景にあるグローバリズムに関して批判的に研究した山本⁹⁾、権利の取り扱いについて批判している三宅¹⁰⁾の研究、その活用法について述べた赤堀¹¹⁾、今村¹²⁾の研究等に分類される。しかし数多く存在する先行研究をみても、死生観構築という観点から内容を分析した研究は類を見ない。

死生観構築という観点から考察する意義は、『学習指導要領解説 道徳編』に定義されている道徳性との関係性にある。『臨床死生学事典』によると死生観とは、「生きることの意味と生の延長線上にある死について、どのようにとらえるかということについての個人の考え方」を指している¹³⁾。『学習指導要領解説 道徳編』に定義されている道徳性はどうだろうか。道徳性とは「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性」であると定義づけられている¹⁴⁾。

人間としての本来的な在り方を考え、自分自身にとってよりよい生き方を目指すためには、自分自身で省察するという行為が必要となる。そのためにはまず自分自身のこれまでの人生を概観し、立ち位置を自覚し、何らかの外的要因に触れ変容してきている存在だということを明らかにしなければならない。これは自分自身という存在を明らかにする必要がある、ということだと筆者は考えている。

哲学の知見を用いながら生と死の教育について研究した三井は、自分自身の存在を明らかにするためには、人生の始まりから終わりまでの全行程を捉える必要があると述べている¹⁵⁾。この指摘から考えると、道徳性の育成には死生観構築という行為がその根底に内包されており、道徳性の育成を目指す上では死生観構築が必要不可欠となる。このように死生観構築と道徳性は密接な関係にあり、道徳教育の充実を図るためにはこの視点が必要だと筆者は考える。以上の観点から本稿では道徳教育での死生観構築に注目し、論を進めていく。

現在道徳教育は4つの内容に分類されている。本稿では、4つの内容分類から特に「生」や「死」に関係性を持つ「主として自然や崇高なもののかかわりに関する内容」に該当する部分を分析対象とする¹⁶⁾。教材の作成順に沿ってまずは『心のノート』について分析を行い、その後『私たちの道徳』について2つの観点から分析を行う。1つは該当部分のページ数とその

他内容項目のページ数との比較である。量的に「生」や「死」の取り扱いを分析したい。次に内容における「生」や「死」の位置づけである。書き物教材、読み物教材のどちらにおいても、「生」や「死」がどのように語られ、どのような位置づけに置かれているのか分析したい。これらの作業を通して教育内容から道德教育での死生観構築の実際を検討し、今後の道德教育のあり方について論じていく。

2 『心のノート』

『心のノート』は学習指導要領に記載されている 4 つの内容項目、「主として自分自身に関すること」、「主として他の人とのかかわりに関すること」、「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に対応して 4 章構成となっている。本節では前述した通り、「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」に分類される章の内容について分析していく。

2-1 第 1 学年及び第 2 学年用

2-1-1 配当ページ数について

第 1 学年及び第 2 学年の総ページ数は 103 ページとなっている。11 ページまでは導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。94 ページから 101 ページまでは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、102 ページと 103 ページは保護者が児童生徒へのメッセージを記入する部分となる。

上記部分を除いた 12 ページから 93 ページの 4 章構成の中で「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」に該当する部分である「いのちにふれよう」という章は 54 ページから 69 ページが該当し、全体の中で 16 ページ分となっている。その他内容項目と比較すると表 1 のようになる。

表 1 第 1 学年及び第 2 学年用『心のノート』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人とのかかわりに関すること	主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	主として集団や社会とのかかわりに関すること
ページ数	22	20	16	24

(執筆で作成)

この比較から分かるように、「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」に該当する節は最もページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として集団や社会とのかかわりに関すること」である。ページ数から考えると「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」はさほどウェイトを占めていないことが想像に難くない。

2-1-2 取り扱われている内容について

内容は、全 16 ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して 3 つに分類できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は 4 ページ、「自然」について考える部分は 4 ページ、「美しいもの」について考える部分は 4 ページという構成となっていた。これらが内容の核となり、終末の 2 ページ分がまとめとしての役割を担う。

「自分自身」に関しては、自分自身の出生に関する内容を書き物教材を使用し考える項目や、「元気カード」を塗るという行為を通して児童生徒が生きている実感を持つことを目的とした項目がある。「元気カード」には「朝元気におきられた」などの記述があり、これは「生きている証」を実感する生活経験の例として学習指導要領に記載されている例をそのまま使用している。

「自然」に関しては、動植物の飼育栽培に関する内容を書き物教材を使用して考える項目や、実際に自然環境の中に動植物を見つけさせることで、より生命の存在を実感することができるような項目がある。

「美しいもの」に関しては、「雲」や「風」といった自然を例として挙げ、書き物教材を使用して考える項目がある。学習指導要領にて、児童生徒の身近な自然の美しさに触れる中で指導していく必要性が述べられており、それに沿った形で「雲」や「風」が例として挙げられていると考えられる。

これらの内容を踏まえて見開きでまとめの役割を担ったページがある。ここでは見出しとして「生きているね。つながっているね。かがやいているね。」と主語のない言葉が並べられている。この言葉は「生きているね。（そして）つながっているね。（だから）かがやいているね。」と読むことが可能となる。生きていることと他者と繋がることは並立関係にあり、それを背景としてかがやくことが可能となるということはつまり、他者と繋がるが出来ていなければかがやくことも不可能となることを暗喩しているのではないだろうか。

また、使用されている画像は稚魚や植物の芽といった「自然」の「生」を連想させるものと、必ず複数人で写っている「人間」の「繋がり」を連想させるものである。「人間」の「生」を連想させるような画像はなく、また、「人間」が一人である画像も存在していない。ここからも「生」というものが、「他者との繋がり」ありきの存在として捉えられていることが分かる。

2-2 第 3 学年及び第 4 学年用

2-2-1 配当ページ数について

第 3 学年及び第 4 学年の総ページ数は 112 ページであり、第 1 学年及び第 2 学年よりも 9 ページ分増量している。9 ページまでは、導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。98 ページから 111 ページまでは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、

112 ページは児童生徒に向けたメッセージとなっている。

上記部分を除いた 10 ページから 97 ページの 4 章構成の中で、「主として自然や崇高なもののかかわりに関する内容」に該当する部分である「いのちを感じよう」という章は 54 ページから 67 ページが該当し、全体の中で 16 ページ分となっている。総ページ数は増加したにもかかわらず、該当箇所の増減は見られなかった。その他内容項目と比較すると表 2 のようになる。

表 2 第 3 学年及び第 4 学年用『心のノート』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人のかかわりに関すること	主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	主として集団や社会のかかわりに関すること
ページ数	24	20	16	28

(執筆者作成)

前節同様に、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する章は最もページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として集団や社会のかかわりに関すること」である。

2-2-2 取り扱われている内容について

内容は、全 16 ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して 3 つに分類できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は 4 ページ、「自然」について考える部分は 4 ページ、「美しいもの」について考える部分は 4 ページという構成となっていた。これらが内容の核となり、終末の 2 ページ分がまとめとしての役割を担う。

「自分自身」に関しては、「生きている」ことについて書き物教材を使用し考える項目や、「一生けんめい生きるとは、思いきり取り組むこと」とし、児童生徒の「思いきりやってみたいこと」を記述する項目がある。児童生徒が自分自身の意思を自覚しそれを表出するという点において、この項目は児童生徒の人生を自己決定していく土台となり得ると評価することができる。しかし、この項目には同時に問題点も存在していた。見開き 2 ページに渡っているこの項目は、見出しとして以下の記述がある。それは「かけがえのないのちだから、みんな助け合って生きている みんな一生けんめい生きている」というものだ。この記述では「みんな助け合って生きている」という言葉が「みんな一生けんめい生きている」という言葉よりも前に構成されている。この構成からすると、「自己」の「生きる」という意思よりも先に「他者」の存在を強調した印象を与える。さらにこの見出しの下、左ページには「わたしたちは、多くの人びとにささえられて生きています。」という言葉が置かれている。左開きで横書きの文字という構成となっている『心のノート』において、この部分に先に児童生徒の集中が向けられるのは必然的

であろう。これはまさに「他者」ありきの「自己」であるという思考様式を象徴し、それを児童生徒に与えているのではないだろうか。

「自然」に関しては、動植物にも人間と同様に生きる力を所持していることを書き物教材を使用して理解させる項目と、人間と動植物が共存し生きてきたことから改めて自分自身と動植物との関わりを振り返らせる項目がある。

「美しいもの」に関しては、「美しい自然は、あなたの心も美しくします。」としている上で、自然だけではなく人の心の美しさにも注目している。そこに挙げられているのは「千と千尋の神隠し」に対する児童作文の抜粋である。ここには「黄金より、自分を助けてくれた「ハク」（川のせい）のいのちのほうが大切だと思ったのです。千の心は美しいと思いました。」と述べられている。何の疑問も感じずにすんなりと「物（黄金）よりも命を大切にしたい」と読むことが出来そうな記述であるが、実はこの記述では実際の話の流れが把握できない。選択というのは、それに至るまでの過程や選択に至った背景、そしてその意図が重要である。この記述は過程も背景も、選択をした千の意図も示されていない。

千は、知り合いもおらず心細い中で自分に親切に接してくれたハクに対して恩を感じ、そしてハクと親密な関係を築く。対して黄金を与えようとしたカオナシは、千に恩を感じ喜ばせたいという意図からこの行動を取っている。しかし千はカオナシに対して恩を売った覚えはない。このような前提から、千は物（黄金）と命を比較したのではなく、ハクとの親密性や自分に対して与えられていた恩を行動の根幹としていっていると考えられる。しかしその点についてあえて触れないことで、自分の欲求よりも他者を優先するという、「他者」ありきの「自己」という思考様式の強制がここでも表れているのではないだろうか。

これらの内容を踏まえて、見開きでまとめの役割を担ったページがある。ここには「いま自分にあたえられたいのち」とあり、自分自身の「生」は与えられたものだという前提で述べられている。果たしてこれは誰から与えられたというのだろうか。自分自身の「生」について自己決定し自己充実を果たしていく権利を持ち得ている人間に、与えられた「生」という概念は不必要だと筆者は考える。

2-3 第5学年及び第6学年用

2-3-1 配当ページ数について

第5学年及び第6学年の総ページ数は128ページであり、第3学年及び第4学年よりも16ページ分増量している。9ページまでは導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。116ページから127ページまでは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、112ページは児童生徒に向けたメッセージとなっている。

上記部分を除いた10ページから115ページの4章構成の中で、「主として自然や崇高なものとかかわりに関する内容」に該当する部分は「生命を愛おしむ」という章である。この章は

62 ページから 77 ページが該当し、全体の中で 16 ページ分となっている。第 3 学年及び第 4 学年と同様に、総ページ数は増加したにもかかわらず、こちらも該当箇所の増減は見られなかった。その他内容項目と比較すると表 3 のようになる。

表 3 第 5 学年及び第 6 学年用『心のノート』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人とのかかわりに関すること	主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	主として集団や社会とかかわりに関すること
ページ数	28	24	16	38

(執筆者作成)

こちらも前節同様に、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する章は最もページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として集団や社会とかかわりに関すること」である。他の学年用に比べて 10 ページ以上もページ数が増加し、重点が置かれていることを推察できる。

2-3-2 取り扱われている内容について

内容は、全 16 ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して 3 つに分類できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は 4 ページ、「自然」について考える部分は 4 ページ、「美しいもの」について考える部分は 4 ページという構成となっていた。これらが内容の核となり、終末の 2 ページ分がまとめとしての役割を担う。

「自分自身」に関しては、児童生徒の生活経験や学習経験を振り返る書き物教材を使用し、自分自身の「生」について捉え直すという項目となっている。ここにおいても、「生」は誰かから与えられたものだという前提が存在する。例として「たったひとつの、かけがえのないものをわたしたちはもらった。」という表現や、「あたえられたいのち」という表現が挙げられる。自分自身の「生」について捉え直す前提として、「生」は誰かに与えられたものだという思考様式を児童生徒に植え付けようとしている。

さらにもう 1 点、「他者」の存在を強調して語るという特徴もみられる。「多くのものに支えられているものだから」という表現や「支えられてきたいのち」という表現がその例である。さらに「まるで、ひとりで大きくなったような顔をしているけれど実はいろいろなことに感謝しなければならないと思う。」という記述もあり、「他者」の存在に対して「感謝」することを要求している。

生きるということは等しく人々が所有している権利であり、公権力から干渉されず自己決定することができる日本国憲法で保障されている。確かに人間は他者と関わりコミュニティの

中で生きている。その中で他者は変容の外的要因になりうるが、他者によって生命が成立するものではない。この表現から、「自分自身」の「生」は「他者」の存在があることによって成立するものだという思考様式を児童生徒に強く与え、全体のためと称して個人を犠牲にしようとする全体主義を押し付けていると筆者は考えている。

「自然」に関しては、人間は動植物などの自然に生かされて生きてきたことから改めて自分自身と自然との関わりを振り返らせる項目がある。「わたしたちは自然から生きる力をもらっている」という記述に現れているように、自然と共存してきたというよりは自然から「生」を与えられたという思考様式を与えられている。ここでは「生」を与えている存在が「自然」なのだと言明している。児童生徒に自然は自分自身の「生」をもたらす存在なのだと言明しているのではないだろうか。

「美しいもの」に関しては、自然を「人間の力を超えた」「大いなるもの」として取り上げている。ここでは東山の文章を以下のように引用している。

山の雲は雲自身の意志によって流れるのではなく、また、波は波自身の意志によってその音を立てているのではない。それは宇宙の根本的なものの動きにより、生命の根源からの導きによってではないでしょうか。そうであるならば、この小さな私自身も、また野の一本の草も、その導きによって生かされ、動かされ、歩まされているのではないか、そう思えてならないのです。

この文章からは、自分自身の「生」が何らかによって動かされているという東山の考えが読み取れる。つまり、自分自身の「生」の主権者が自分自身ではないかもしれない、という可能性を示唆しているのである。

さらに読み進めていくと「わたしたちを生かす自然」と記述されている。前述した「自然」との関連性から考えると、自然は人間に「生」をもたらし、そしてその「生」を存続させる「大いなるもの」と取り扱われていることが分かる。

これらの内容を踏まえて見開きでまとめの役割を担ったページがある。ここには「かけがえのないいのち」という見出しが2ページに渡り大きく掲げられている。また、「いのちのはじまりがあり終わりがある」と、直接的ではないが「死」の存在について取り上げられている。これまで「死」を暗示する記述は見当たらなかったため、ここで初めて登場したことになる。「死」についてはさらに以下のように記述されている。

だけどいつか 必ずくる そのときが
失われたら 二度と もどっては来ない
いまのわたしには とてもこわくて 想像できないけれど

「かけがえのない」とは ということ

この言葉たちは「死」から「生」の有限性を理解させる。しかし、「想像できないけれど」とし、いずれ訪れる「死」に対しての思索を停止させるような表現となっていると筆者は考える。自分自身の「生」の有限性を理解するためにはそれを想像し、思索する必要があるのではないだろうか。学習指導要領においてもこの学年段階であれば「死」を理解できていると記述されているにも関わらず、『心のノート』では「死」に関する理解を停止させる働きがあると推測することができる。

3 『私たちの道徳』

『私たちの道徳』は、学習指導要領に記載されている 4 つの内容項目、「主として自分自身に関すること」、「主として他の人とのかかわりに関すること」、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」、「主として集団や社会のかかわりに関すること」に対応して 4 章構成となっている。本節では前述した通り、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に分類される章の内容について分析していく。

3-1 第 1 学年及び第 2 学年用

3-1-1 配当ページ数について

第 1 学年及び第 2 学年の総ページ数は 160 ページとなっている。同学年を対象とする『心のノート』と比べると、約 1.5 倍のページ数となり増加が認められる。7 ページまでは導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。158 ページと 159 ページは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、160 ページは児童生徒に向けたメッセージとなっている。上記部分を除いた 8 ページから 157 ページの 4 章構成の中で「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する部分は「いのちにふれて」という章である。この章は 88 ページから 115 ページが該当し、全体のうち 28 ページ分となっている。その他内容項目と比較すると表 4 のようになる。

表 4 第 1 学年及び第 2 学年用『私たちの道徳』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人のかかわりに関すること	主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	主として集団や社会のかかわりに関すること
ページ数	44	36	28	42

(執筆作成)

これをみると、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する章は最も

ページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として自分自身に関すること」である。

3-1-2 取り扱われている内容について

内容は、全 28 ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して 3 つに分類できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は 12 ページ、「自然」について考える部分は 8 ページ、「美しいもの」について考える部分は 6 ページという構成となっていた。

「自分自身」に関しては「(1) いのちを大切に」という節となっており、自分自身の出生に関する内容を書き物教材を使用し考える項目や、「生きている」と実感する瞬間について児童生徒が想起しやすいように生活経験を例として挙げている項目がある。この内容から、『心のノート』とは大幅な変更は見られない。しかし、『心のノート』と比較するとこの項目はページ数が大幅に増加しており、大きく変更となったのは 8 ページ分の読み物教材が 3 つ追加された点だと判断できる。

読み物教材は「おはかまいり」と「ハムスターの赤ちゃん」、「生きているってすばらしい」である。この中で「ハムスターの赤ちゃん」は身近な生物から命の誕生を考える内容となっており、「生きているってすばらしい」は歌詞の内容から自分自身の「生」や他者の「生」を理解する内容である。

対して「おはかまいり」では、人間ではなく象ではあるが「死」が登場している。当該学年代階における『心のノート』では、「死」が想起される内容が描かれることはなかった。この教材では象が「死」を迎えると人間と同様に展墓のような行動を行うことから、他者との繋がりを意識する内容となっている。文章中には「今、おじさんたちがこのせかいにいるのは、ご先祖さまのおかげだものね。」という表現があり、先祖崇拝を促す内容であると評価することができるのではないだろうか。確かに人間はコミュニティに所属し、他者と繋がる中で生きている。この点を児童生徒が理解することは必要だが、「ご先祖さまのおかげだものね。」とあえて記述することによって、自分自身の「生」と先祖との関係性のみを強く意識する必要があるのだろうか。

「自然」に関しては「(2) 生きものにやさしく」という節になっており、動植物の飼育栽培に関する内容を書き物教材を使用して考える項目や、読み物教材を通して動植物の「生」を意識する項目がある。『心のノート』と比較するとこの項目もページ数が増加しているが、6 ページ分の読み物教材が追加された点によると判断できる。内容については、身近な動植物を挙げることで動植物の「生」を意識する内容となっており、『心のノート』とは大幅な変更は認められない。

「美しいもの」に関しては「(3) すがすがしい心で」という節になっており、「みの回りにあるすてきなものをさがしてみよう。」とまずは児童生徒に考えさせる項目がある。『心のノ-

トでは』先に「雲」や「風」といった自然を例として挙げていたが、児童生徒が考える内容へと変更されている。その後「海」が例として挙げられており、「美しいもの」と「自然」を結びつける点で変更はない。やはり学習指導要領にて、児童生徒の身近な自然の美しさに触れる中で指導していく必要性が述べられていることに起因すると考えられる。

『心のノート』では終末にまとめるページが存在していたが、『私たちの道徳』においては存在していない。

3-2 第3学年及び第4学年用

3-2-1 配当ページ数について

第3学年及び第4学年の総ページ数は176ページとなっている。同学年を対象とする『心のノート』と比べるとこちらも第1学年及び第2学年と同様に約1.5倍のページ数となる。7ページまでは導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。170ページから173ページは情報モラルに関する内容が初登場している。174ページと175ページは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、176ページは児童生徒に向けたメッセージとなっている。上記部分を除いた8ページから169ページの4章構成の中で「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する部分は、「命を感じて」という章である。この章は88ページから115ページが該当し、全体のうち28ページ分となっている。全体のページ数は増量しているにもかかわらず該当する章に関しては第1学年及び第2学年と同ページ数である。これは『心のノート』時にも見られた傾向である。その他内容項目と比較すると表5のようになる。

表5 第3学年及び第4学年用『私たちの道徳』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人のかかわりに関すること	主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	主として集団や社会のかかわりに関すること
ページ数	46	34	28	58

(執筆者作成)

こちらも前節同様に、「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」に該当する章は最もページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として集団や社会のかかわりに関すること」である。前学年用と比べてページ数が増加し、重点が置かれていることを推察できる。

3-2-2 取り扱われている内容について

内容は、全28ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して3つに分類

できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は12ページ、「自然」について考える部分は6ページ、「美しいもの」について考える部分は8ページという構成となっていた。

「自分自身」に関しては「(1) 命あるものを大切に」という節となっており、第1学年及び第2学年に引き続き「生」を具体的に想起させ、自分自身が「生きる」ということについて具体的に考察する項目や、他者との繋がりの中にある「生」を理解する項目、他者の「死」という読み物教材から「生」について考察する項目から成っている。8ページ分の読み物教材が追加され、『心のノート』からはページ数が増加した。

児童生徒が自分自身の「生」を考察する項目において、『心のノート』では「他者」の存在を強く印象付ける文章表現がされていたが、今回は冒頭に「他者」を想起させるような文章表現は見当たらない。使用されている画像は友人と寄り添い明るい表情を浮かべている男児たちであるため、全く「他者」を想起させないものではないが、前回からの改善が見受けられる。しかし次項にて「わたしたちは、多くの人にささえられて生きています。」という文章があり、やはり「他者」の中の「生」が『私たちの道徳』においても根強く位置づけられていると言えよう。

さらに、「他者」の「死」から「生」を考える読み物教材が追加されている。「死」という直接的な言葉は使用していないが、「この世を去りました。」や「命の電池はしずかに切れました。」という隠喩表現で表されている。その上で、小学4年生の宮越さんが院内学級の授業で書いた作文が読み物教材として掲載されている。そこには、「私は命が疲れたと言うまでせいっぱい生きよう」という記述がある。自分自身の「生」のあり方を自己決定する姿を読み取ることが出来る。しかし「(命は) 神様から与えられるものだ」という記述から自分自身の「生」は与えられるものだという思考様式が印象として残る。これは『心のノート』においても頻繁に見られた傾向である。

院内学級を担当した先生からのメッセージは、宮越さんの他者に対する行動を暗に賛美するものだった。これは「他者」のために生きている姿を賞賛しているように捉えることが出来る。宮越さんの作文は自分自身の「生」のあり方について考え、自己決定して生きていく主権者として力強い能動性が読み取れるにも関わらず、その印象を薄れさせてしまう可能性があるのではないだろうか。

「自然」に関しては「(2) 自然や動植物を大切に」という節になっており、動植物の飼育栽培に関する内容を書き物教材を使用して考える項目や、読み物教材を通して動植物の「生」を意識する項目がある。『心のノート』と比較するとこの項目もページ数が増加しているが、6ページ分の読み物教材が追加された点によると判断できる。内容については身近な動植物を挙げることで動植物の「生」を意識する内容となっており、『心のノート』から大幅な変更は認められない。

「美しいもの」に関しては「(3) 美しいものを感じて」という節になっており、自然は人間の力を超えた神秘的な存在として扱われ、その前提を基に書き物教材や読み物教材がある。「人間の力をこえた自然の風景などに感動したことがありますか。」という記述から、自然に対する捉え方は明確に読み取れよう。読み物教材では『花さき山』が使用されており、それに対する作者からのメッセージが以下のように記載されている。

われわれは一人ではなくみんなの中の一人です。みんなの中でこそ、みんなとのつながりを考えてこそ、自分が自分なのです。そしてさらに、自分のためだけでなく、みんなのために生きようとする人々が大勢出てきました。だれもがもっているそういう心の花の芽を、山を生み出すまでの力にもり上げられたら、自分は、みんなは、どんなにかすばらしくなることでしょう。

メッセージは、自分自身の「生」が他者との関係性の中にあることを強調している。自分自身の生きる権利というものは自分自身のために行使するのではなく、他者のために行使するものだとし、そうすることで成立する「生」を賞賛している。他者のために存在する「生」を美しいものであるとし、それを自然の美しさに関連付けて表現しているといえよう。

3-3 第 5 学年及び第 6 学年用

3-3-1 配当ページ数について

第 5 学年及び第 6 学年の総ページ数は 192 ページとなっている。同学年と対象とする『心のノート』と比べると、こちらも他学年用と同様に 1.5 倍のページ数となっている。7 ページまでは導入や児童生徒自分自身について記述する書き物部分にあたる。184 ページから 187 ページは情報モラルに関する内容が第 3 学年及び第 4 学年に続き登場している。188 ページと 191 ページは児童生徒の振り返りを目的とした書き物部分となり、192 ページは児童生徒に向けたメッセージとなっている。

表 6 第 5 学年及び第 6 学年用『私たちの道徳』 内容項目ごとのページ配分

	主として自分自身に関すること	主として他の人とのかかわりに関すること	主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	主として集団や社会とかかわりに関すること
ページ数	46	42	22	66

(執筆者作成)

上記部分を除いた 8 ページから 183 ページの 4 章構成の中で「主として自然や崇高なもののかかわりに関する内容」に該当する部分は、「命をいとおしんで」という章である。この章は

96 ページから 117 ページが該当し、全体のうち 22 ページ分となっている。全体のページ数は増加しているにもかかわらず、該当している章に関しては減少が見られた。他学年には見られなかった傾向がこの学年段階には存在している。その他内容項目と比較すると表 6 のようになる。

こちらも前節同様に、「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」に該当する章は最もページ数が少ない。ページ数から見て最も多い項目は「主として集団や社会とかかわりに関すること」である。前学年用よりもさらにページ数が増加し、「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」と比較すると 44 ページもの差がある。

3-3-2 取り扱われている内容について

内容は、全 22 ページの中で学習指導要領における内容項目の指導の観点に即して 3 つに分類できる。それは「自分自身」と「自然」と「美しいもの」である。「自分自身」について考える部分は 12 ページ、「自然」について考える部分は 4 ページ、「美しいもの」について考える部分は 4 ページという構成となっていた。

「自分自身」に関しては「(1) 自他の生命を尊重して」という節となっており、10 ページ分の読み物教材と、自分自身の出生から現在までを書き物教材を使用し考える書き物教材が 2 ページ分ある。『心のノート』と比較するとこの項目は読み物教材が大幅に追加されていることが分かる。

読み物教材は 2 点の特徴がある。まずは「多くの人たちに生かされていくもの」という記述から分かるように、自分自身の「生」が生かされているものであるという思考が強調されている点である。1964 年の東京オリンピックで、ヨット競技の際に勝敗よりも他の選手の救助を優先した実話を取り上げ、勝敗よりも命を大切にしていると賞賛している。確かにこの選手は、勝敗よりも他者の「生」を優先しているかもしれない。しかし、それは選手の「生」の上に競技スポーツが成立するためであり、自分自身の「生」よりも他者の「生」を優先しているわけではない。生命の危機に瀕した他者を救助したこの話を取り上げ、自分自身の「生」が生かされているものであるとすり替えているのではないだろうか。これは競技スポーツそのものの意義を捻じ曲げ、個人の尊厳を低めてしまい、国家の統制下に個人を陥れてしまうと筆者は考える。

次に、「死」を取り上げ、「生」の有限性に触れている点である。これまでの学年段階においては直接「死」という言葉は使用されてこなかったが、ここでは「死」という言葉が使用されている。『心のノート』ではあまり触れられてこなかった「死」について、『私たちの道徳』においては全学年段階で触れられ、そして、直接意識することが出来るよう改善されていると評価できる。

しかしその取り扱いに問題もある。「死」について児童生徒が考える「その思いを受けついで」という読み物教材をみていきたい。ここでは大地が母親から祖父が余命 3 ヶ月ということを告

げられ、死ぬまでの祖父との関わり方を描いた物語である。大地に祖父が余命を知っているのか問われた際の物語中の母親の言葉を取り上げたい。

「ううん。お母さんには言えない。悲しむ顔を見るのはつらいし、それより一日でも多くじいちゃんとの限られた時間を大切に楽しく過ごしたいわ。だから、このままそっとしておこうと思うの。」

この決断は母親の意思を優先したものであり、祖父の意思について考えられたものであろうか。「自他の生命を尊重して」という題のもと、この節が存在しているにも関わらず祖父の意思が反映されないことはおろか、祖父が自分自身の「生」について自己決定することができていない。やはりここでも、自分自身の「生」は他者によって成立されているものだと位置づけられているのではないだろうか。

「自然」に関しては「(2) 自然の偉大さを知って」という節になっており、主に読み物教材を中心とした構成となっている。ここでは、「私たちはこの大いなる自然に生まれ、生きている」と表現されている。自分自身の「生」は、自然に生かされているものと解釈することが可能である。

「美しいもの」に関しては「(3) 大いなるものを感じて」という節になっており、具体的な自然現象を例として挙げ、自然を神秘的で美しく偉大なものとしている。宇宙飛行士の毛利衛の言葉を読み物教材として使用している。「美しい地球 生命宿る地球」という題で始まる文章は、宇宙空間で生存することができない生命が地球では生存することが可能であることや、その地球を宇宙空間から見る際の美しさが述べられている。さらに、地球上で様々な生命が人間とかかわり生き続けてきたことに言及し、共存していく重要性にも触れられている。これらの表現から、この節においても自分自身の「生」は生かされているものと位置づけられている。美しい自然も自分自身の「生」を生かしているものであり、その中でその他の生物と共存していくことが重要だとされている。

4 考察

4-1 全体を占める割合

『心のノート』と『私たちの道徳』における「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」に該当する節は、その他3つの節と比較して最も少ない。『私たちの道徳』においては『心のノート』に比べてページ数は増加しているものの、全体的にページ数が増加したことから該当部分のみが増加されているわけではないことがわかる。そして、道徳教育の4つの内容項目において相対的にみると他の項目の取り扱いの方が多い。この状況では、道徳教育において教員が独自に資料を使用して授業を行うことを除くと、「生」や「死」を取り扱う機会は比

較的に少ないと言えよう。現在、医療技術の発達により「死」が時間的にも空間的にも遠ざかっている状況である。学校教育においても「死」を取り扱う機会が少ないということは、死生観構築が十分に促されていないのではないだろうか。

『心のノート』と『私たちの道徳』を概観して、最もページ配分が多かった項目は「主として集団や社会とのかかわりに関すること」である。これは「個」よりも「集団」の取り扱いが多いことを表している。日本国憲法では個人の尊重を原則としているため、「個」の取り扱いの充実のもと「集団」の取り扱いが成立するはずである。しかし現状では「集団」に重きが置かれ、全体主義的思想を教育で強制してしまう可能性があるといえよう。

4-2 生かされている「生」

取り扱われている内容を概観すると、自分自身の「生」の位置づけについて一貫した特徴がある。それは自分自身の「生」が何者かに生かされているものだという位置づけである。これは特に『心のノート』で顕著に見られた特徴であり、『私たちの道徳』では直接的な表現は減少したものの根底に根深く残る思考様式であった。

自分自身の「生」を生かしているものとしては他者や自然があげられている。自然については、『心のノート』と『私たちの道徳』のどちらにおいても美しく人間の力を超えた大いなるものとして表現されている。他者に関しても『私たちの道徳』においては先祖の存在について触れられ、現実には存在していない他者をも含めていることが分かる。

さらには、他者や自然というつながりのために生きることを賞賛する傾向も見られる。他者や自然によって生かされている「生」であることを背景に、自分自身のためだけではなくそれらに感謝することを要求し、そしてそのために生きることを特に読み物教材を使用して児童生徒に要求している。

自分自身の「生」の主権者は自分自身である。人間は何らのコミュニティに属し、他者や環境といった外的要因に触れることで思考様式や行動様式を変容させながら自己充実を果たし生きていく。ここでの「生」の主権者は他者ではなく、他者はあくまでも外的要因である。なぜなら生きると言うことは等しく人々が所有している権利であり、公権力から干渉されずに自己決定することができる日本国憲法で保障されている¹⁷⁾からだ。生かされている「生」という位置づけでは、自己決定権を正しく理解することができない。

教育基本法において、自立的に生きる基礎を培うことが義務教育の目的とされている。しかし、生かされている「生」という位置づけでは自立的に生きる基礎を培うことは不可能であろう。生かされているということはその主権を自己が所持していないということを意味している。それでは主体性や能動性を育むどころかそれらを公権力が剥奪しているのではないだろうか。

この位置づけにおかれている理由としては、教育の目的を国家及び社会の形成者の育成に置いていることが挙げられる。教育基本法第1条では教育は「人格の完成を目指し、平和で民主

的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」とされている。この目的は、「人格の完成」という個人的側面と「国家及び社会の形成者」の育成という社会的側面の 2 つの側面から成る。この社会的側面である「国家及び社会の形成者」の育成という部分に教育の目的の大半を置いてしまっているのではないだろうか。

そもそも道徳性とは市民社会の中で個が尊重され、他者との間に衝突を避けるために必要となる資質である。それぞれが豊かな道徳性を持ち、個を尊重する中で平和で民主的な国家及び社会が形成される。これは日本国憲法では個人の尊重を原則としており、全体のためと称して個人を犠牲にしようとする全体主義は否定していることに基づく¹⁸⁾。以上のような民主主義の根本的な理解や道徳性に関する理解が現在まで深く浸透していないという問題点がこのことから分かる。

5 おわりに

本稿では、小学校における道徳教育での死生観構築がいかに行われているかについて、教育内容から明らかにするために、広く使用されている補助教材である『心のノート』と『私たちの道徳』を取り上げ考察してきた。『心のノート』と『私たちの道徳』では、「生」の取り扱いについて 2 つの特徴が確認できる。

まずは全体を占める割合についてである。道徳教育は内容項目が 4 つに分類されている。その内、死生観構築を促す項目は「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」である。この項目は『心のノート』と『私たちの道徳』のその両者とも、道徳教育の 4 つの内容項目の中で最も割かれたページ数が少ない。『私たちの道徳』では『心のノート』に比べるとページ数が増加しているが全体的に増加したにすぎず、4 つの項目の中で最もページ数が少ないことに変化はない。

これは道徳教育において死生観構築に関する項目が取り扱われる割合の少なさを表している。医療技術の発達により「死」が時間的にも空間的にも離れた存在となった現在において、「死」や「生」を考える時間が道徳教育において確保されていないということは、死生観構築を十分に促すことが出来ていないと評価できるだろう。

次に、自分自身の「生」が生かされている「生」と位置付けられているということである。現在存在していない者を含めた他者や、人間の力を超えた美しく大いなる自然によって自分自身の「生」は生かされているのだということが強調され、児童生徒に繰り返し伝えられている。さらには他者や自然のために生きることを賞賛する記述も多く、日本国憲法で否定している全体主義を児童生徒に強制していると捉えることができる。

これは人権という視点から自分自身の「生」を個人の権利として位置づけることができおらず、自己決定権の正しい理解を促すことが出来ない状況である。主体性や能動性を国家とこ

う公権力が児童生徒から剥奪しているこの状況は早急に改善すべきではないだろうか。

今後の課題としては、道徳性や民主主義社会に対する正しい理解を促すことが挙げられる。道徳教育が国家及び社会形成を目的としたものではなく、あくまで個の尊重を主軸としたものであると改めて理解した上で道徳教育を実施していく必要がある。また、その上で教育内容において自分自身の「生」を決定する主権は児童生徒個人にあると位置づけ、その内容について検討していく必要がある。

<注>

- 1) 文部科学省初等中等教育局、「文科省初中局長「心のノート」について（依頼）」、2002 年（http://www.ne.jp/asahi/kyokasyo/net21/siryou_020422kokorono.htm）
- 2) 文部科学省、「道徳教育実施状況調査結果（平成 24 年度実施）の概要」、2013 年（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/09/1222218_2.pdf）
- 3) 文部科学省初等中等教育局、「道徳教育用教材「私たちの道徳」について」、2014 年（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/02/1344132.htm）
- 4) 文部科学省初等中等教育局、「「私たちの道徳」活用状況等調査結果」、2014 年、（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/_icsFiles/afieldfile/2016/08/09/1222218_4.pdf）
- 5) 高橋順子、「「心のノート」誕生の経緯に関する研究—「道徳教育推進指導資料」にかかわる議論を軸に—」、『道徳教育方法研究』19、2013 年、pp.21-30
- 6) 瀬川均、「文部科学省配布「心のノート」の危険性」、社会主義協会、『科学的社会主義』55、2002 年、pp.34-37
- 7) 平林浩、「国定道徳教科書と『心のノート』（シンポジウム「心」まで管理しないで）」、『人権と教育』38、2003 年、pp.48-53
- 8) 高垣忠一郎、『「心のノート」に対して抱く重い危惧』、『人権と部落問題』55、2003 年、pp.14-21
- 9) 山本由美、「道徳教科化の背景にあるグローバリズム」、民主教育研究所、『人間と教育』82、2014 年、pp.62-69
- 10) 三宅晶子、『「私たちの道徳」は権利と自由をどう教えているか』、『社会民主』(707)、2014 年、pp.4-58
- 11) 赤堀博行、「「私たちの道徳」の効果的な活用」、『初等教育資料』940、東洋館出版社、2016 年、pp.8-45
- 12) 今村信哉、「特別活動 中学年 実践の場で生きる「心のノート」活用法」、『道徳と特別活動』26(4)、文溪堂、2009 年、pp.26-28
- 13) 安達富美子、「日本人の死生観」、河野友信・平山正実編、『臨床死生学事典』、日本評論社、2000 年、p.18
- 14) 文部科学省、『学習指導要領解説 道徳編』、2008 年
- 15) 三井善止、「第 5 章 生と死の教育」、三井善止編、『生と死の教育学』、北樹出版、1992 年、pp.188-203
- 16) 道徳性の育成は道徳教育の目的でありどの内容分類においても関係性が認められるが、本稿においては特に学習指導要領の記述からも「生」や「死」との関係が認められるこの内容分類に焦点を定めて検討し、その他は後の検討課題とする。
- 17) 小林孝輔・芹沢斉編、『別冊法学セミナーNo.189 基本法コンメンタール第 5 版/憲法』、日本評論社、2006 年、pp.6-9, pp.61-88
芦部信喜、高橋和之補訂、『憲法 第 6 版』、岩波書店、2015 年、p.10, pp.36-37, pp.39-43, pp.75-127, pp.149-153
- 18) 前掲 17

主指導教員（相庭和彦教授）、副指導教員（雲尾周准教授・篠田邦彦教授）